来福の森の物語
山が育てた人、人が育てる森

はじめに

奥飛騨の山あい、標高約 1,000 メートル。
そこに、福地温泉という小さな温泉地があります。
初めて訪れた人には、静かな山里に見えるかもしれません。
しかし、少し時間を過ごしてみると、この土地にはほかの場所にはないものがあることに気付きます。

深い森。
静けさ。
何百年も続く祭り。
山へ続く道。
そして、人の温かさ。

ここでは、人は自然に勝とうとしてきたのではありません。
自然とともに生きる道を選び続けてきました。
来福の森は、その暮らしの中から生まれた森です。
これは観光施設の物語ではありません。
一つの山里と、一つの森、そしてそこに関わる人々の物語です。

第一章　山が村を育てた

福地温泉は、焼岳をはじめとする火山群に囲まれた山岳地帯にあります。
夏は涼しく、冬は１メートルを超える雪が降り積もり、氷点下１５度にもなる厳しい土地です。
それでも、人々は何百年もの間、この山で暮らしてきました。
その理由は、山そのものにあります。
福地では、サンゴや三葉虫の化石が見つかっています。
今では信じられませんが、この山は、はるか昔、海の底でした。
何千万年もの歳月をかけて海底は隆起し、火山が生まれ、温泉が湧き、人が暮らす土地になりました。
来福の森の井戸を掘ったときにも、焼岳の噴火による火山礫の層、その下には古代の海を物語る石灰層が眠っていました。

この土地では、

山も、

森も、
温泉も、
そして人の暮らしも、
すべて同じ時間の流れの中にあります。

人々は山を畏れ、祈り、祭りを受け継ぎながら暮らしてきました。
子どもたちは舞を覚え、大人はその意味を伝えます。
時代が変わっても、人から人へ受け渡される文化だけは変わることがありませんでした。

第二章　眠っていた森

来福の森は、最初から森ではありませんでした。
江戸時代には、人々の暮らしを守るための隠し田んぼ。
明治・大正には、養蚕を支える桑畑。
昭和になると、温泉街を支える場所。
そして 1969 年、祖父がこの土地を購入しました。
しかし、その後、森は約五十年間、人の手を離れます。
クマザサが生い茂り、人が歩くことも難しい森になりました。
けれど、森は眠っていただけでした。
専門家による植生調査では、多くの樹木や山野草、鳥や動物たちが豊かに生きていることが分かりました。

人が離れても、
森は生き続けていました。
そして、もう一度、人が戻ってくる日を静かに待っていました。

第三章　森との出会い

2020 年。
一本の電話が、私を森へ戻しました。
雪で危険木が倒れる恐れがあるため、土地所有者として立ち会ってほしい。
初めて森へ入りました。
クマザサをかき分けて進むと、
突然、明るい森が現れました。

鳥の声。
沢のせせらぎ。
木漏れ日。

その瞬間、思いました。
「この森を、このまま眠らせておくのは、もったいない。」
誰かと、この時間を分かち合いたい。

その想いから、森をひらくプロジェクトが始まりました。

道を整え、
危険木を手入れし、
道具番屋を建て、
地域の人と出会い、
少しずつ森は、人を迎える場所になっていきました。

しかし同時に、一つの問いも生まれました。
祖父は、なぜこの土地を買ったのだろう。
その答えは、今も分かりません。

私は、その答えを探しながら、今も森を歩いています。

第四章　福地が教えてくれたこと

森を整備するようになってから、私は福地の人たちにたくさんのことを教わりました。

町内を歩いていると、
「どうしたん？」
と自然に声を掛けてもらえます。

何気ない一言ですが、そのたびに心が落ち着きます。
都会では忘れかけていた、人を気遣う暮らしがここにはあります。
雪深い冬を越えるためには、一人では生きていけません。

だから助け合う。
祭りを守る。
祠を守る。
道を守る。
森も同じです。

木は人よりはるかに長く生きます。

一人の人生では森は完成しません。

だから、人から人へ手を渡していく。

私は、この土地で初めて知りました。

森を育てることは、

木を育てることではなく、

人と人とのつながりを育てることなのだと。

第五章　終わらない物語

来福の森は、完成を目指す森ではありません。

私たちは、この森を保存したいのではありません。

未来へ受け渡したいのです。

森で本を読む人。
子どもたちが木の枝で工作をする日。
山菜を囲んで笑い合う時間。
冬の雪の森で動物たちの足跡を追いかける人。
森の映画会で空を見上げる夜。
祠までの道を、みんなで少しずつ整えていく日。

そして、道具番屋でお茶を飲みながら、
「今日は少し森へ行こうか。」
そんな会話が自然に生まれる日常。

子どもたちは、この森を遊び場として覚えます。
やがて大人になり、自分の子どもを連れて帰ってきます。

遠く海外から来た人も、
ふと、
「あの日本の小さな森は、今どうなっているだろう。」
と思い出してくれるかもしれません。

その一つひとつのつながりが、
百年後の来福の森を育てていくのだと思います。

私は今も、祖父がこの土地を買った理由を知りません。
そして、その答えは一生見つからないかもしれません。
でも、それでいいのだと思っています。

森を歩き、
人と出会い、
一緒に手を動かし、
また新しい物語が生まれる。
その積み重ねこそが、来福の森だからです。

来福の森は、一人が完成させる場所ではありません。

地域の人が育て、
訪れた人が関わり、
子どもたちが受け継ぎ、
次の世代へ手渡していく森です。
来福の森は、目的地ではありません。

未来への招待状です。

この森で立ち止まり、
耳を澄まし、
山とともに生きてきた人々の時間に触れ、
そして、未来へ何か一つ残して帰っていただけたなら、それ以上の喜びはありません。

森が育ち続けるように、来福の森の物語も終わることはありません。

これからも、この森を歩く一人ひとりとともに、新しい一ページが書き加えられていきます。